336年前の夏、その名残を訪ねて。

# Cradle

夏号
vol.87
2025 Summer

出羽庄内地域文化情報誌［クレードル］

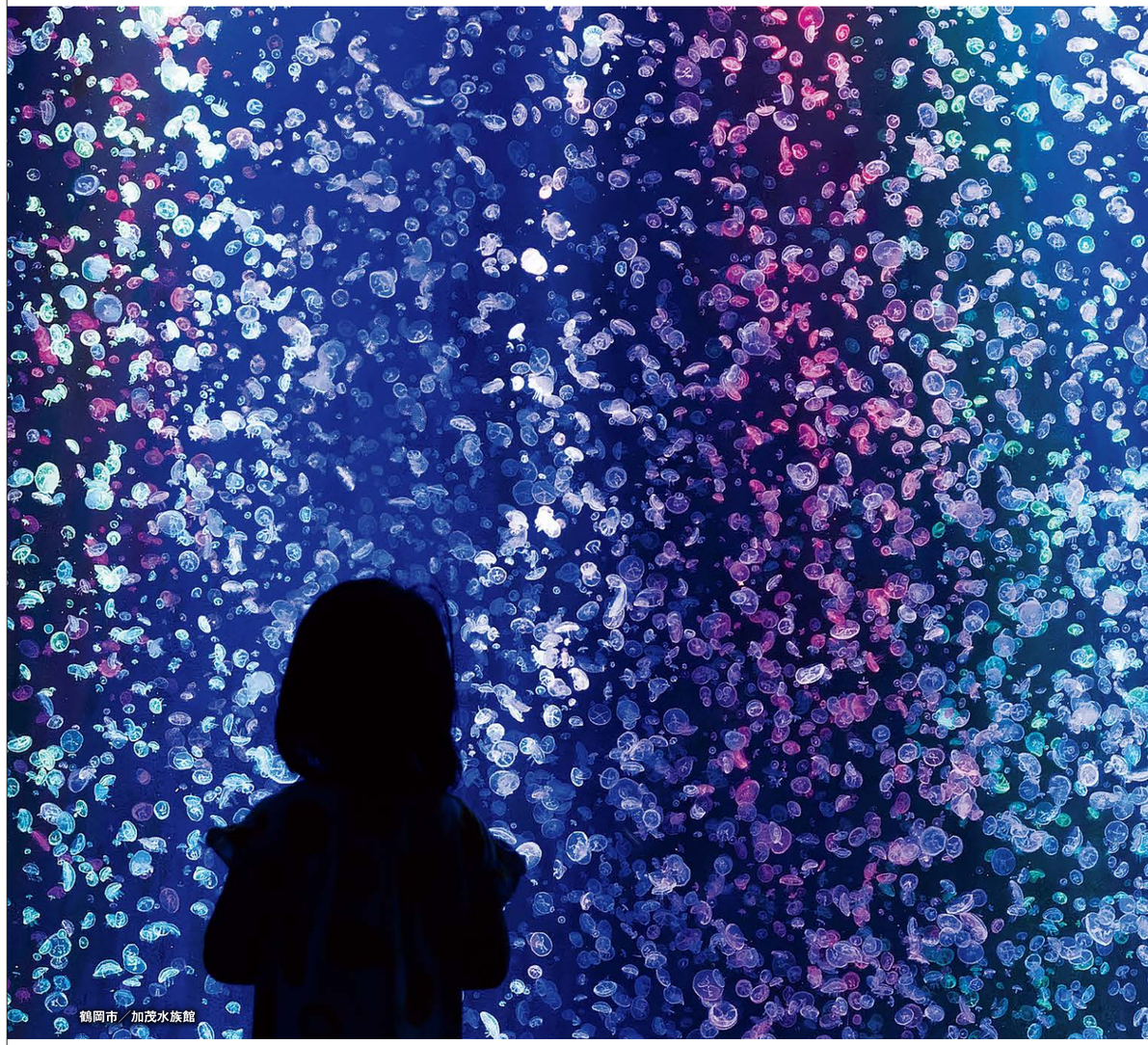
特集

## おくのほそ道
## 出羽路をあるく

ご自由に
お持ちください
TAKE FREE

Cradle｜夏号
出羽庄内地域文化情報誌［クレードル］
令和7年7月1日発行
2025 Summer vol.87
発行／Cradle事務局　山形県鶴岡市山王町8-15［株式会社 出羽庄内地域デザイン］電話0235(64)0888
制作／Cradle編集部　山形県酒田市宮田2-59-3［コマツ・コーポレーション］電話0234(41)0012

IDEA GROUP


鶴岡市／加茂水族館

光のパレットで描く　夏の絵日記

荘内銀行

庄内への手紙
［5通目］

# 庄内という風土

俳人
**水内 慶太**

月山の峰に光る稚児車

写真提供=『月の匣』同人 あべ小萩

『おくのほそ道』の流麗な文体に誘われ、五千石先生共々、芭蕉の句をたどる旅にみちのくをさすらったのはもう三十年も昔のことになる。その旅路で出会った庄内という風土は、ふしぎとどこか懐かしさを覚えるものがあり、俳句を詠むにも格好の材料に満ちていて、爾来たびたび訪れるようになった。春の湯田川で、今は亡き村上護先生と孟宗づくしの膳を前に語り合った夜などは殊に忘れ難い。

そんな旅を契機に若い人たちと小さな句会を持ち、夏には月山へ鳥海山へとカメラを携えては吟行を重ねてきた。可憐な高山植物の写真を撮ることは喜びであり、「切り取る」ことは句にも写真にも通じると思ったし、若い人たちの成長も楽しみであった。

冬の鶴岡で「寒鱈まつり」や「黒川能」に出会ったのもこの頃。酒田の「黒森歌舞伎」もまた然り。いずれも、写真の題材としても句の材料としても一級の、濃密な気配を蔵した催しである。長年伝承されてきた郷土芸能には、土地に密着した息づかいがあり、どこをとってもすべての日本人にとっての原風景といった体なのだ。厳しい上にも厳しい自然環境だからこその豊かさとでもいうのだろうか、あるいは、握りしめておくほかないものが営々と継ぎ継がれ現在に至っているという、奇跡的な往時性とでもいうのだろうか、一瞬にして歴史を圧縮してしまうような力を感じるのだ。

**――村人に熱燗のあり歌舞伎あり　慶太**

みちのくの冬は極めて寒い。そのさなかには五穀豊穣の神に祈るよりほかないであろう、かような風土の生む一途さを思うのだ。芭蕉は見ることのなかった「冬のおくのほそ道」だが、もし見たとしたら一体どんな風に感受したことだろうか。

句会の後は決まって「庄内ざっこ」に立ち寄り、季節のものを肴に地元の方々と語らう。それは心にとっての滋養ともいうべきかけがえのない時間である。

結社「月の匣」の七周年の折には羽黒山・大進坊で記念の会を設けた。五重塔を仰ぎ、最上川を舟で下り、芭蕉が見たと同じ景色を見ていることに感動を覚えずにはいられなかった。それは同行の連衆も同様だったことだろう。

さて、庄内に通った年数ほどは確実にこちらも年を取ったわけで、あとどれほどこの地を訪うことが可能かなどと思いを巡らす日には、懐かしさが一層募る。あらためて胸の内に庄内という風土をかみしめている。

**――月山の裾の筍流しかな　慶太**

**――万緑や死は一弾を以て足る　五千石**

**みのうち・けいた ｜ 俳人**

昭和18年北京生まれ、東京在住。昭和59年より上田五千石に師事。平成2年より俳人協会会員。平成14年句集『月の匣』上梓。平成22年「月の匣」を結社・創刊し主宰。令和元年句集『水の器』上梓。洗練された詩情が持ち味の作家。鶴岡で句会を持ったことが縁で庄内地方をたびたび訪れている。

特集

# おくのほそ道 出羽路をあるく

昔むかしの旅が、今の私たちの道しるべになることがあるかもしれない。
そう想いながら、松尾芭蕉『おくのほそ道』に導かれて出羽路を歩きました。
300年以上も時を越えて届く庄内の風光、芭蕉が見た風景、感じた空気。
なぜ旅に出たのか。なぜこの道を選んだのか。
それはまるで今の私たちが生きる問いとつながるようでもありました。
自身の俳諧哲学と向き合った、漂泊の詩人のその足跡にふれる出羽、庄内の旅。
風景も、時間も、少し違って見えてくるかもしれません。

参考資料＝久富哲雄校訂『蕉尾集』（1963、明治書院）、飯野哲二著『去来抄・三冊子』（1967、学燈社）、森敦著『われもまた おくのほそ道』（1988、日本放送出版協会）、酒田古文書同好会編『方寸 第八号』『芭蕉来遊三百年特集』（1988、本の会）、柴田悳也著『芭蕉来遊三〇〇年記念　庄内路の芭蕉』（1989、本の会）、田村寛三著『続 酒田きさある き』（1990、酒田きさある き会）、加藤楸邨著『芭蕉全句 中』（1998、筑摩書房）、梅津保一著『おくのほそ道 出羽路の旅』（2005、東北出版企画）、尾形仂著『芭蕉の世界』（1988、講談社）、長谷川櫂著『「奥の細道」をよむ』（2007、筑摩書房）、長谷川櫂著 NHK「100分de名著」ブックス『松尾芭蕉 おくのほそ道』（2014、NHK出版）、長谷川櫂著『古池に蛙は飛びこんだか』（2013、中央公論新社）、長谷川櫂著『「おくのほそ道」を読む 決定版』（2025、筑摩書房）
協力＝出羽三山歴史博物館
トビラ写真＝羽黒山頂から月山への旧参道

『おくのほそ道』の句と本文の表記は、尾形仂著『おくのほそ道 評釈 日本古典評釈・全注釈双書』（2001、角川書店）、潁原退蔵・尾形仂 訳注『新版おくのほそ道　現代語訳／曾良随行日記付き』（2003、角川ソフィア文庫）に依拠しました。

# 芭蕉はなぜ東北を目指したのか

**まだ東北が辺境といわれていた江戸時代前期、松尾芭蕉は、約2400キロにもおよぶ約150日間の東北旅を経て、「おくのほそ道」を完成させました。なぜ芭蕉は東北を訪れたのか。そもそも芭蕉とは何者だったのか。その生い立ちから振り返ります。**

## 芭蕉の生い立ち

松尾芭蕉の生まれは寛永21（1644）年。三重県の伊賀上野で育ち、青年期は武家に仕えながら貞門派の俳人・北村季吟に俳諧を学びました。20代で江戸に移住し、当時流行していた談林派の滑稽な作風の影響も受けながら俳諧師として頭角を現し、35歳で宗匠となります。次第に自分の句作に疑問を持ち始め、37歳で江戸深川に「芭蕉庵」を結び、独自の俳諧を求めるように。形式や技巧にとらわれず、自然や日常の詩心と向き合うにつれ、世俗を捨て旅に生きた鎌倉時代の歌人・西行に憧れ、旅への渇望が生まれます。そうして41歳の時、奈良や京都、大津、名古屋をめぐる9カ月間の「野ざらし紀行」へ出立。芭蕉の心の旅が始まりました。

## 古池や蛙飛びこむ水の音

### 「蕉風開眼の句」誕生

「野ざらし紀行」の翌年（1686）に芭蕉庵で詠まれたのが、名句「古池や蛙飛び込む水の音」です。民俗学や古典文学を研究する鶴岡市在住の春山進さんは話します。「『古池や』の句は、芭蕉が古池に飛び込む蛙を見て詠んだようにみえますが、実際にはポチャンという水音を聞いただけで、庵に古池はありませんでした。つまり芭蕉は、水音を聞いて心に思い浮かんだ『古池』をあてたのです。これは画期的なことでした」。

長谷川櫂著『松尾芭蕉　おくのほそ道』によると、古来人の心の表現として伝わってきた和歌に対し、当時の俳諧は通俗的な言葉の遊びと捉えられていました。しかし芭蕉は水音を聞いたという「現実」と古池という「心象」を組み合わせることで、俳諧を詩情と深みのある文学の域に高めたのです。それが新しい俳諧の幕開け、「蕉風開眼の句」となりました。

一方、和歌にたびたび登場する「白河の関」「松島」「象潟」などの歌枕は、歌人たちが想像で作り上げた架空の名所で、東北地方は辺境の地ゆえ「歌枕の宝庫」といわれていました。「ここに芭蕉が東北の旅に出た理由があります。芭蕉は歌枕をたどりながら、自分が開拓した新たな文学を確認し、展開させようと考えたのです」と春山さん。4年後、芭蕉は門弟の曾良と「おくのほそ道」へと旅立ちます。

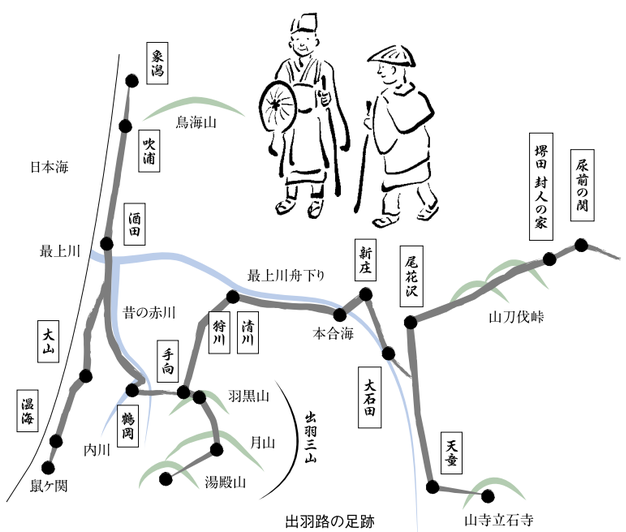
## 歌枕の旅、みちのく（陸奥国）へ

西行500回忌にあたる元禄2（1689）年の旧暦3月27日（新暦5月16日）、芭蕉46歳で深川を出発。神社や寺を訪ねながら白河の関（福島県）に着き、みちのくへと歩を進めます。しかし実際に訪れた歌枕は想像とはかけ離れ、すでに廃墟となっていたところも。芭蕉は落胆続きの中で、目的地の一つである松島（宮城県）では大きな感動を得ましたが句は残さず、初めて歌枕の呪縛から解放された名句が生まれたのは平泉（岩手県）でした。杜甫の「国破れて山河あり　城春にして草青みたり」をひいた上で、「夏草や兵どもが夢の跡」を詠み、みちのくの歌枕の旅に終止符を打ちます。

## 夏草や兵どもが夢の跡

## 出羽国（山形県）へ

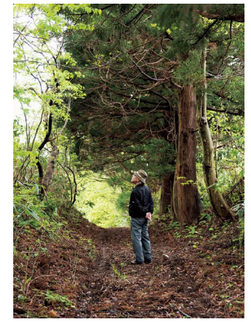
平泉で源義経の面影に触れた芭蕉は、予定していた国越えコースを変更し、出羽仙台街道中山越を通って出羽国に向かいました。日本海側から最上川を上って平泉に着いたとする『義経記』を逆にたどるルートともいわれています。



「紙本淡彩奥の細道図」与謝蕪村（レプリカ）
蕪村64歳の作、安永8年の記とされる。「おくのほそ道」全文と、「山刀伐峠越え」や「鶴岡の長山重行宅」など9場面が描かれた六曲屏風。国指定文化財。原本は（公財）山形美術館収蔵。

山寺（宝珠山立石寺）の開山堂

最上川の白糸の滝と舟下り


芭蕉が歩いたとされる手向へ向かう難所「添川赤台」

# 閑かさや岩にしみ入蝉の声

旧暦5月15日（新暦7月1日）、番所「尿前の関」を越え、大雨のため堺田（最上町）の「封人の家」へ。2泊後、屈強な若者の案内で「高山深々として一鳥声聞かず、木の下闇茂り合ひて夜行くがごとし」難所、山刀伐峠を越え、尾花沢へ到着します。そして旧知の紅花商人・鈴木清風と地元の俳人たちから11日間の手厚い歓待を受け、彼らの勧めで山寺の立石寺に向かいました。この予定外の山寺行きが大きな転機となります。

## 山寺での宇宙的静寂体験

旧暦5月27日（新暦7月13日）、尾花沢から馬を乗り継ぎ、天童から山寺街道を歩く途中で「眉掃きを俤にして紅粉の花」を詠み、山寺へ。午後3時頃に到着して立石寺を詣で、山上からの景色を眺めている時に、芭蕉は「突然、蝉の鳴きしきる現実の向こうから深閑と静まりかえる宇宙が姿を現」す体験をし、「閑かさや岩にしみ入る蝉の声」の名句が生まれます（※）。「芭蕉はこの山寺での神秘的な体験を機に、出羽三山から佐渡にかけて宇宙的な句を詠みました。芭蕉の文学的境地が開かれたのが、まさに出羽路の旅だったといえます」と春山さん。

## 最上川から庄内へ

翌日、山寺を後にした芭蕉と曾良は、大石田の俳人・高野一栄宅に泊まり、尾花沢で知り合った高桑川水も交え、「このたびの風流ここに至れり」と『おくのほそ道』に記した歌仙を巻きます。尾花沢で知り合った俳人・渋谷風流に招かれて新庄にも立ち寄り、歌仙を興行。旧暦6月3日（新暦7月19日）、本合海から最上川を下る船に乗りました。

# 五月雨をあつめて早し最上川

最上川は古くから歌枕として知られ、白糸の滝や仙人堂など数多くの義経伝説が残る名所です。芭蕉はその大河を下りながら古に思いを馳せ、最上川の急流を身を以て体験。大石田の歌仙で詠んだ「さみだれをあつめてすずしもがみ川」を実体験の「五月雨を集めて早し最上川」と改めました。

## 最上川上陸地の謎

最上川を下り、芭蕉と曾良が上陸したのは庄内藩の番所があった清川（庄内町）といわれています。「最上川の上陸地についてはまだ解決していないことがあるんです」。春山さんはその一説に、新庄から持参した通行手形に不備があり、番所を通れなかったことが『曾良旅日記』に書かれていることを挙げます。もう一つは、出羽路は『義経記』をたどる旅ゆえ、清川に上陸後は義経伝説が残る御諸皇子神社を参詣し、羽黒古道から羽黒山に向かうのが自然という説です。「しかし芭蕉は御諸皇子神社には行かず、わざわざ遠回りをして狩川経由で羽黒山に向かいました。だから上陸地は清川ではなく狩川なのでは、という説があります。まあ真相はわかりません」。

庄内藩の関所だった清川には歴史公園が整備され、芭蕉像が建つ。

図司呂丸追悼句碑が建つ鳥崎稲荷神社（羽黒町手向）

## 手向から羽黒山へ

旧暦6月3日（新暦7月19日）午後5時頃、鶴岡市羽黒町手向の俳人・呂丸（図司左吉）宅に到着。大石田の高野一栄から預かった羽黒山別当代の会覚阿闍梨宛ての紹介状を渡します。呂丸は高名な江戸の俳人が目の前に現れたことに驚き、すぐに紹介状を阿闍梨がいる山内の本坊若王寺へ。手向に戻ると、芭蕉と曾良を南谷別院へ案内しました。「涼しさやほの三日月の羽黒山」は、この日に詠んだものとされています。

# ありがたや雪をかほらす南谷

翌4日、芭蕉は本坊若王寺に赴き、阿闍梨に謁見。呂丸など地元の俳人の他に、羽黒山を訪れていた京都の釣雪らも加わり、8人で歌仙を興行します。この時の芭蕉の発句「ありがたや雪をかほらす風の音」は後日「ありがたや雪をかほらす南谷」と推敲されました。

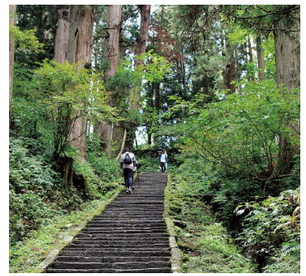
5日、三山巡りのために精進潔斎し、羽黒権現（出羽三山神社三神合祭殿）を参詣。阿闍梨に頼まれて天宥法印への追悼文を書き、翌日の月山登拝に備えます。

※長谷川櫂著『松尾芭蕉　おくのほそ道』（NHK出版）

**春山 進さん**
元県立高等学校国語教諭、元県立博物館長、庄内民俗学会顧問。芭蕉研究は、若かりし頃に授業で初めて『おくのほそ道』を教えた際、生徒から「なぜ芭蕉は東北の旅にきたのか」と質問を受けたことを機に始めたという。

# 涼しさやほの三日月の羽黒山

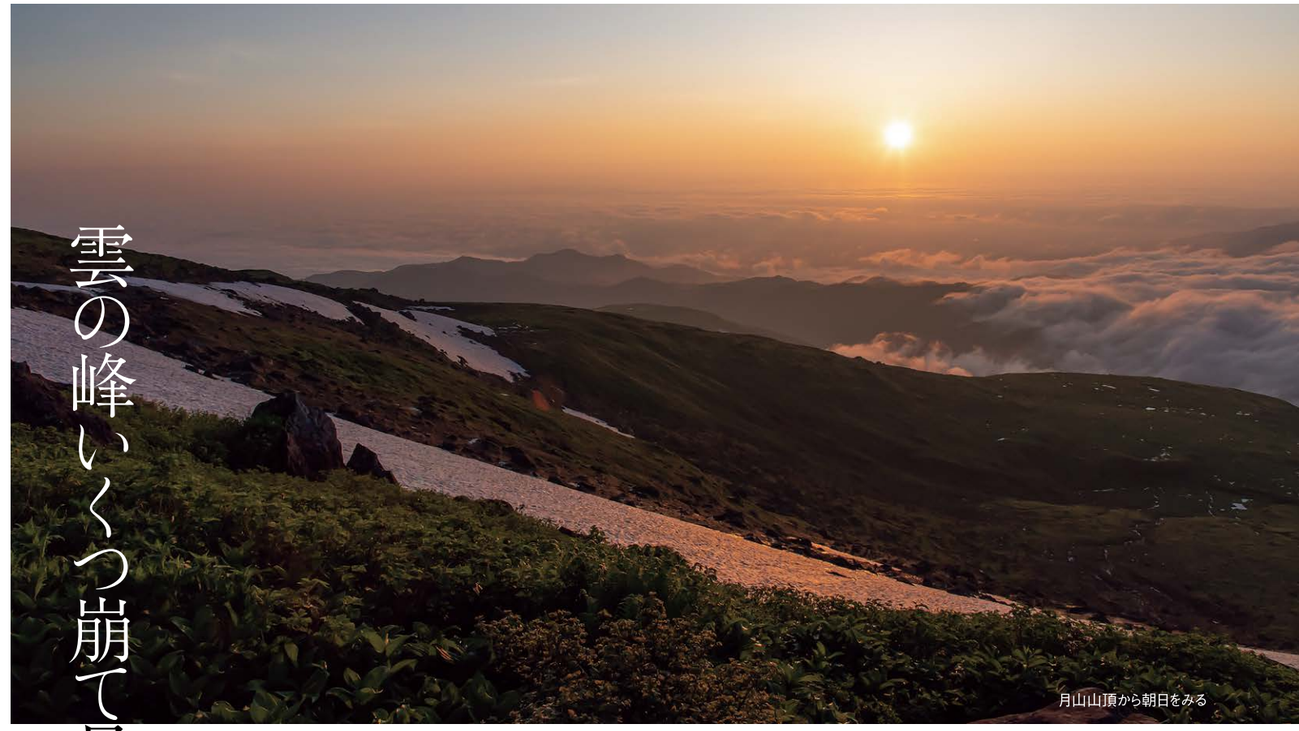
芭蕉と曾良が6泊した南谷別院跡



羽黒山石段は、芭蕉が訪れる前に第50代別当天宥が完成させたという。

出羽三山の山頂に鎮座する出羽三山神社三神合祭殿。江戸時代までは神仏習合の山だった。

出羽三山歴史博物館には、芭蕉による天宥追悼句の直筆が展示されている。



月山山頂から朝日をみる

# 雲の峰いくつ崩て月の山

## 月山、湯殿山へ

旧暦6月8日（新暦7月24日）、芭蕉と曾良は白布の宝冠で頭を包み、強力に案内されて途中を馬で、7合目からは雲と霧に覆われた約32キロの山道を、氷雪を踏み、息も絶え絶え、凍えきった体で登ります。「雲の峰いくつ崩れて月の山」は、月が照らす月山の頂で、昼に盛り上がった入道雲が移り変わる天空の様を想像して描いた句とされています。

夏の月山は今も白装束に身を包み、月山登拝をする人が絶えない。

羽黒山山頂にある芭蕉像



# 語られぬ湯殿にぬらす袂かな

この日は山頂の山小屋で笹を敷いて横になり、夜が明けるとすぐに湯殿山へ向かい、湯殿権現（湯殿山神社）を参詣しました。湯殿山は「語るなかれ、聞くなかれ」の御山。芭蕉は詳細を示さず、「語られぬ湯殿にぬらす袂かな」と感嘆を込めて詠んでいます。

昼近くに再び月山山頂に戻り、羽黒山へ。南谷に到着したのは辺りが暗くなった頃でした。翌日と翌々日は休息を取りながら阿闍梨の労いともてなしを受け、三山巡礼の句を短冊に残しました。

## 出羽三山で得た不易流行

さて芭蕉は、「おくのほそ道」紀行を終えて間もなく、大垣（岐阜県）で弟子たちに「不易流行」を説き始めたといいます。東北の旅のどこで不易流行という境地が芭蕉にもたらされたのか。長谷川櫂氏は、『おくのほそ道』の月山のくだりにある「日月行道の雲関に入るかと怪しまれ」に着目しています。月山を登っている時に得た、太陽や月が運行する天の入り口に入ったかのような「宇宙的な体験」がきっかけだったのではと。また一見対立するように見える「不易」と「流行」を芭蕉が「其元は一つ也」と説いたのは、人も花も生まれてはやがて消えゆく「流行」だが、宇宙から見れば実は何も変わらない「不易」であり、「この流行即不易、不易即流行こそが芭蕉の不易流行だった」（※）と解説しています。

春山さんはこの長谷川氏の説に加え、芭蕉が出羽三山で不易流行を得た背景には、庄内の信仰風土もあるのではと推察しています。「出羽三山は生まれかわりの山です。芭蕉は月山で死に、湯殿山で新たな生を得て、羽黒山で現世に戻りました。庄内は生の山・鳥海山と死の山・月山を一望する一つの宇宙空間であり、よみがえりの信仰風土が色濃く残る地です。芭蕉の不易流行は、庄内というコスモスを旅したから感じ得た悟りではないかと思います」。

# めづらしや山をいで羽の初茄子

## 羽黒山から鶴岡へ

旧暦6月10日（新暦7月26日）、南谷別院を発ち、本坊若王寺で接待を受けて阿闍梨らに見送られ、手向から芭蕉は馬で、曾良と呂丸は歩いて鶴ヶ岡城下へ。夕方、長山重行宅に到着しました。長山は庄内藩士で、江戸詰の際に芭蕉と知り合い、交流のあった俳人です。その日の夜、長山、曾良、呂丸と「めづらしや山をいで羽の初茄子」を発句とする歌仙を始めました。しかし出羽三山登拝の疲れのせいか持病が悪化し、翌11日の歌仙は昼で中止。12日に一巻が完了しました。

旧暦6月13日（新暦7月29日）、芭蕉と曾良は内川の乗船場から舟に乗り、赤川と最上川を下って酒田を目指します。当時、赤川と最上川は交わっていたため、内川は酒田湊と鶴ヶ岡城下を結ぶ重要な川路でした。

※長谷川櫂著『奥の細道』をよむ』（ちくま新書）

古より「語るなかれ」と伝えられている湯殿山

芭蕉が酒田に向かう際に乗った内川の乗船場跡

おくのほそ道 特集
出羽路をあるく

# 暑き日を海にいれたり最上川

日和山から酒田湊の夕景

日和山の文学の散歩道には、29基のうち3基に芭蕉の句が刻まれている。「温海山」の句碑は天明8（1788）年、日和山に最も早く建てられた文学碑。句碑の中には芭蕉の足跡をたどってこの地を訪れた文人たちの句も多い。

## 川と海が出合う湊酒田で

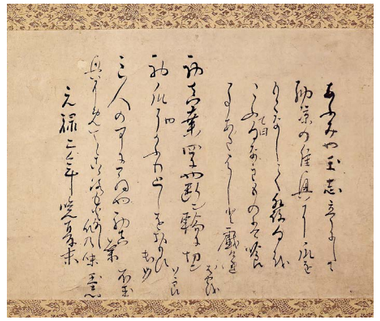
日和山公園の芭蕉像は彫刻家・日下部幸四郎作

現在の暦では8月になろうとする時季、芭蕉と曾良が最上川河口の湊町、酒田に着いたのは日も暮れた頃でした。ここから酒田を巡る芭蕉の旅は、山形県詩人会の相蘇清太郎さんと歩いてみます。

当時の酒田は河村瑞賢が整備した西回り航路によって、湊町として発展の只中にありました。芭蕉と曾良は、医師で酒田俳壇の中心だった伊東玄順（俳号・不玉）宅をよりどころに、2日目には浦役人の寺島彦助（俳号・令道※）宅に招かれて「涼しさや海に入れたる最上川」を発句に連句の会を7人で開きました。『涼しさや』は、もてなしへの礼を込めた挨拶句です。芭蕉は『おくのほそ道』本文では『涼しさや』を『暑き日を』と改めました。雄大な河口を表現する句に独立させたんですね」。

翌6月15日（新暦7月31日）、芭蕉と曾良は目的地の一つ、象潟へと発ちます。徐々に雨脚が強まり、吹浦で一宿。あくる日も雨の中を三崎峠の難所を越え、象潟に到着しました。「江山水陸の風光数を尽くして、今象潟に方寸を責む」。方寸は「心」の意味。芭蕉は心を尽くして名跡に句を寄せ、旅のクライマックスを迎えました。

象潟から快晴の空を酒田へ戻り、19日から21日（新暦8月4日～6日）まで不玉宅で「あつみ山や」を芭蕉の発句に、不玉、曾良による歌仙を巻きます。この句がどこで詠まれたのかは多くの人が考察してきた話題です。吹浦か日和山か沖の舟の上か、「あつみ山」は温海岳、ほかに「あつき山」、はたまた「あくみ山」で鳥海山であるとの説まで。「芭蕉は地理的なことをふまえつつ、文学作品としての句の面白さを出そうと工夫したのではないでしょうか」。23日（新暦8月8日）には、芭蕉と曾良と不玉は、富商・近江屋三郎兵衛宅（俳号・玉志）に招かれ、真桑瓜を前に即興の句を詠み合いました。芭蕉の句は「初真桑四つにや断ん輪に切ん」。懐紙に自ら染筆した軽いやわらかな筆致からも、その場の座の雰囲気が伝わってくるようです。


近江屋三郎兵衛（俳号・玉志）宅での即興の句を書いた芭蕉の直筆。《玉志亭唱和懐紙》本間美術館所蔵

馬も通れない難所だったという三崎山（峠）の旧道。タブ林の緑陰の中に大師堂が静かに佇んでいる。

## 出羽路から旅の終わり

旧暦6月25日（新暦8月10日）、芭蕉と曾良は全9泊に及んだ酒田を離れ、大山と温海で夜を過ごし、鼠ヶ関で43日間の出羽路を後にしました。「芭蕉は庄内で3つの歌仙を巻いています。この土地にはそれだけの文化度があったということです。歌仙一巻（36句）を満尾（完了）するのに数日、その間に土地の理解も人との交流も深まって感じ入ったことが、句に表れていると思います」。

芭蕉は海沿いの越後路を南下し、北陸路を経て旧暦8月（新暦10月）、大垣（岐阜県）でこの旅を結びました。その後5年近くをかけて推敲を重ね、単なる旅行記ではない紀行文学として『おくのほそ道』をまとめます。旅で得た自然観、人生観を「不易流行」に説き、芭蕉は自らの俳諧に「軽み」を求めるように。長谷川櫂氏の文を引くと「『かるみ』とは不易に立って流行を楽しみながら軽々と生きてゆく」理念。出会いと別れがあってもこの世は何も変わらない。ならば一喜一憂することなく生きていくという行動論、生き方であると。芭蕉は「軽み」に到達した後、元禄7年（1694）10月、51歳でその生涯を閉じました。『おくのほそ道』は門弟たちが写本して世に送り出し、文化遺産として今に語り継がれています。庄内でも芭蕉の没後、門弟が一派「美濃派」を広め俳諧文学が盛行しました。相蘇さんが話す「芭蕉が求め広めた、人と交わり詠みあう俳句という文芸」は、庄内の風光と文化の中に生き続けています。

※寺島彦助の俳号は、安種また詮道とも

# 初真桑四つにや断ン輪に切ンカン

# あつみ山や吹浦かけて夕すゞみ

**相蘇 清太郎さん**
元酒田市職員。山形県詩人会に所属、詩誌「シテ」の同人。著書に詩集『ルネサンスに至る神々』（メディア・パブリッシング）。

おくのほそ道特集・付載

# 日和山 文学の散歩道

**松尾芭蕉が上陸したとされる酒田の日和山には、芭蕉の句碑3基を含む29基の文学碑が建っています。日和山公園から山王森をぐるりと周遊する「文学の散歩道」を酒田観光ガイド協会の名ガイド、豊岡紘子さんと一緒に歩きました。**

江戸、明治、大正、昭和にかけて酒田を訪れた、あるいはゆかりの文人の作品を刻んだ句碑が並ぶ「文学の散歩道」。酒田観光ガイド協会の豊岡紘子さんは、ご出身の北海道江差と酒田市、北前船の寄港地というつながりをこの文学碑から感じると言います。

「東北の湊町として広く知られ、多様な文化と人の往来があった象徴ですよね。芭蕉来遊以降、文人墨客その他著名人がおおいに訪れたことを歴史に刻む、素晴らしい文化的な観光資源だと思います」。

文学の散歩道は、昭和59年の酒田市制50周年記念事業の一環で整備されました。芭蕉の「あふみや玉志亭にて」の句碑を起点に、その足跡を訪ねた正岡子規や与謝蕪村ら俳人をはじめ、歌人、詩人、作家、学者らの碑が名を連ねます。「観光の方をご案内する時は『文化勲章受章者が3名』『庄内の哲学三羽烏の1名』『寛政の三奇人の1名』が含まれています、なんてお話すると皆さんその名前に驚かれて『なぜ酒田に?』と興味を持ってくださいます」。

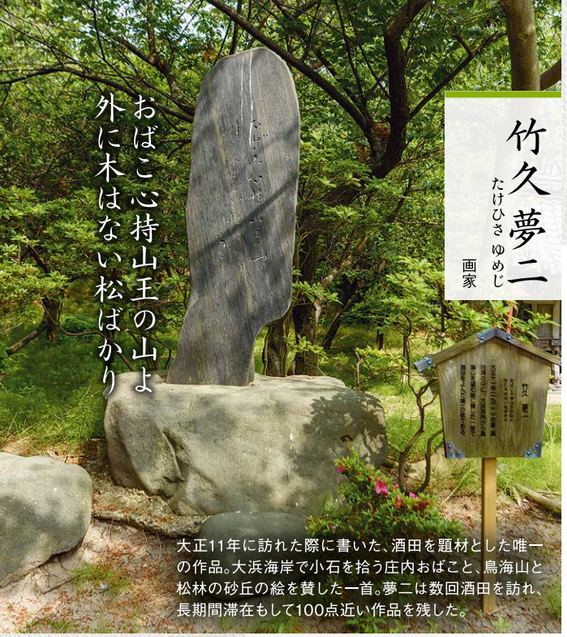
その問いの答えは酒田という土地が持つ詩情なのか、句碑と語らい町を巡るのもいいかもしれません。

「人が紡ぐ言葉、文学は色あせないこともこの文学の散歩道が物語っていますよね」。

## 正岡子規
まさおか しき
俳人・歌人・随筆家

明治26年8月、芭蕉の足跡をたどり最上川を下って酒田を訪れたことが書かれた紀行文「はて知らずの記」より。その時の句「夕涼み山に茶屋あり松もあり」の句碑と「鳥海にかたまる雲や秋日和」（句集『寒山落木』所収）の2基がある。

## 竹久夢二
たけひさ ゆめじ
画家




大正11年に訪れた際に書いた、酒田を題材とした唯一の作品。大浜海岸で小石を拾う庄内おばこと、鳥海山と松林の砂丘の絵を賛した一首。夢二は数回酒田を訪れ、長期間滞在もして100点近い作品を残した。

## 小倉金之助
おぐら きんのすけ
数学者・数学史家

酒田・船場町の廻船問屋に生まれ、世界的な数学者として活躍。『数学教育の根本問題』（大正13年）、『近代日本の数学』（昭和31年）など数学史家としての論著も多く、明治から昭和にかけて教育界に与えた影響は大きい。

## 伊藤吉之助
いとう きちのすけ
哲学者

酒田出身。荘内中学から旧制一高に進み、東京帝大を卒業。ドイツ留学後は北海道大、中央大教授などを歴任。『岩波哲学小辞典』の編者や日本哲学会会長も務めた。阿部次郎（松山）宮本和吉（朝日）とともに「庄内の哲学三羽烏」。

## 伊東不玉
いとう ふぎょく
俳人・医師

酒田の俳人であり医師。芭蕉来遊の折には自邸に迎え、元禄5年には自選の『継尾集』を刊行。この句は芭蕉から「句体幽玄、俳意奇妙に覚候」と賛された作（「不玉独吟集 秋の夜」所収）。芭蕉没後も高弟の去来に「かるみ」の教示を仰ぐなど酒田俳壇をけん引。

## 斎藤茂吉
さいとう もきち
歌人・精神科医

昭和22年、大石田から歌人の板垣家子夫とともに酒田を訪れた際に詠んだ歌の2基が建つ。茂吉は明治28年の修学旅行や昭和15年にも来酒。芭蕉来遊の地としても親しみを持っていたとされる。昭和26年、文化勲章受章。

### 道案内

**酒田観光ガイド協会**
**豊岡紘子さん** *Toyooka Hiroko*

北海道江差町出身。日本体育大学卒業後、郷里で教職に就きながら長く観光ガイドを務める。平成11年にご長女が住む酒田に移住。酒田観光ガイド協会の発足時メンバーにして現役。松山温泉「観音湯」敷地内の種田山頭火の句碑建立の協力者として、碑文を揮ごうした。

参考資料＝佐藤三郎著『日和山界隈』（1985、本の会）、月刊「SALOON」2005年11月号特集「日和山公園、文学の散歩道」、光丘文庫報「館報 光丘」相蘇清太郎「日和山『文学の散歩道』の案内」159号～163号（2021～2023）、荘内日報社ホームページ「郷土の先人・先覚」ほか